



辺野古米軍基地建設を許してはならない!

5月27日。「美ら海壊すな 土砂で埋めるな 5.27 国会包囲行動」には、1万人が参加し、「辺野古新基地建設反対!」に加えて「9条改憲絶対反対!」「戦争法はいますぐ廃止」「共謀罪法はいますぐ廃止」の声を上げました。

沖縄の代表は、政府は辺野古新基地建設工事を強行しているが、大変な問題が起こっていると報告。大浦湾側の海底には活断層があり地盤はマヨネーズのように軟弱だということです。

「世界」3月号で、沖縄の土木技術者が「辺野古新基地建設はいずれ頓挫する」と冷静に分析しています。埋立て工事は5年で完了としていたが、3年半経た今でも沿岸の浅い部分で護岸工事に着手した段階で工事は大幅に遅れていると指摘しています。3500億円(当

初予算)もの税金で軍事基地を作って、アメリカに差し出すという政府方針はどう考えてもおかしい。

翁長知事を先頭に沖縄あげて反対の声を上げているにも関わらず、アメリカに対して米軍基地の縮小から撤去を一言も要求せず、名護市長選をはじめ沖縄県内自治体選挙に札びらで介入している政府をこれ以上許していいのでしょうか。

作家の浅田次郎さんは1995年に「週刊現代」連載の「勇気凛凜ルリの色」で「御高配について」と題して書いています(全文は2面)。あの戦争での沖縄県民の闘いと辛苦を讃えて、大田実少将が後世の政府に求めた「特別の御高配」は、今本土の私達に、辺野古米軍基地を許していいのかと問いかけているのではないかと思います。(福島清・水久保文明=写真も)

御高配について

昭和二十年六月六日夜、大本營の海軍次官あてに一通の電報が届いた。

激戦の続く沖縄で孤立無援の小禄地区（現在の那覇空港周辺）を守備する、海軍根拠地隊司令官・大田実少将からの緊急電である。

以下、長文につき一部を抜粋する。

左ノ電文ヲ次官ニ御通報方取計ヲ得度

沖縄県民ノ実情ニ関シテハ県知事ヨリ報告セラルヘキモ 県ニハ既ニ通信力ナク 三二軍司令部又通信ノ余カナシト認メラルニ付 本職県知事ノ依頼ヲ受ケタルニ非サレトモ 現状ヲ看過スルニ忍ヒス 之ニ代ツテ緊急御通知申シ上ク

文面はいきなり、「沖縄県民ノ実情」から始まる。陸軍主力も行政ももはや通信の機能を持たないであろうから、自分がかわって報告をする、というのである。以下、いわゆる「訣別電」の成句である勇ましい戦闘経過や将兵の敢闘ぶりについて、この電文は一行一句も触れない。ただ綿々と、沖縄県民が祖国の防衛に身を捧げ、家屋財産を失い、大変な辛酸をなめたと書きつづる。

——若キ婦人ハ率先軍ニ身ヲ捧ケ 看護婦烹飯婦ハモトヨリ 砲弾運ヒ 挺身斬込隊スラ申出ルモノアリ 所詮 敵来リナハ老人子供ハ殺サレルヘク 婦女子ハ後方ニ運ヒ去ラレテ 毒牙ニ供セラルヘシトテ 親子生別シ 娘ヲ軍衛門ニ捨ツル親アリ 看護婦ニ至リテ 八軍移動ニ際シ 衛生兵既ニ出発シ身寄り無キ重傷者ヲ助けテ

男子は老人から少年まで軍とともに戦い、若い女性は斬込隊を志願し、看護婦となった女学生は軍が残置した重傷者を介抱した。しかもこうした県民の活躍と困難は米軍上陸のはるか以前、日本軍守備隊が進駐してから終始一貫して続けられてきたものである、と大田少将は述べる。依然として作戦経過や戦闘の美辞麗句は一言も記されない。そして、本戦間はすでに末期であり、沖縄は一木一草もない焦土と化してしまったと述べた後で、大田海軍少将は万感をこめて、電文をこうしめくくる。

一沖縄県民斯ク戦ヘリ 県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ

電文には「天皇陛下万歳」も、「皇国ノ弥栄ヲ祈ル」もない。自分が指揮官としてどういう作戦をとったの

かも、陸に上った一万の部下たちが、どのようにして圧倒的な米軍を相手に戦ったのかも、全く記されていない。ただひたすら、沖縄の惨状と県民の労苦を述べ、軍はそれらを顧みる余裕がなかった、と悔いる。沖縄県民はこのように戦ったのだから、後世決しておろそかにはせず、格別の処遇をして欲しい——大田海軍少将はこの電報を玉砕の訣別電として、六月十三日、豊見城村の司令部壕で自決した。

陸軍の主力が牛島軍司令官の自決によって組織的戦闘を終えたのは、その六日後のことであった。

沖縄戦は本土決戦の時間を一刻でも引き延ばすための、いわば捨て石の戦であった。だから軍は、それまでの島嶼戦の定石であった水際での迎撃戦法を用いず、来軍を無血上陸させたのち縦深陣地での防御戦と狙撃や斬込みを主としたゲリラ戦に持ちこんだ。

折からの雨期と重なり、彼我入り乱れた混戦となったこの戦は、戦略的な使命こそ十分に果たしたものの、すべての県民を巻きこんでしまったのである。

勝利の予定はなく、何日持ちこたえるかという戦であった。軍と県民とはこの絶望的な戦を九十日にわたって戦った。

この戦闘にあたって米軍は陸軍と海兵隊の最精鋭七個師団、十八万三千を投入し、後方支援部隊を含めればその総数は五十四万八千にのぼる。史上最大の作戦である。

これを迎え撃つ日本軍は、牛島満中将麾下の第三十二軍二個師団半、しかもその装備も練度もおよそ精強とは言いがたかった。援護といえば、九州と台湾から飛来する特攻機のみであった。

三ヵ月におよぶ戦闘の結果、十二万二千二百二十八名の沖縄県民と、六万五千九百八名の県外出身日本兵が死んだ。この数字は沖縄県援護課資料によるが、むしろ正確ではあるまい。

米軍上陸前の空爆や疎開途上の艦船沈没による犠牲、餓死、戦病死等を合わせれば、県民の犠牲者は十五万人とも、二十万人ともいわれ、この数字は当時の県民人口の三分の一を上回る。

どうか読者の周囲を見渡していただきたい。家族の二人に一人、職場の人々の二人に一人が死んだのである。沖縄の戦闘とは、実にそういうものであった。

小禄の海軍根拠地隊司令官・大田実少将は、陣地構築に当たって荒らされて行くサトウキビ畑を歩き、「ご迷惑をおかけして申し訳ありません、緊急事態をどうかご理解下さい」と農民に詫び続けたという。そうして県民の実情を余すところなく見つめ続けた結果、彼は「天皇陛下万歳」も「皇国ノ弥栄」も「神州ノ不滅」もない訣別の電報を、大本營に向けて打電したのである。

ところで、大田海軍少将が死に臨んでただひとつ国家に願った「特別ノ御高配」は、その後どうなったの

であろうか。

「後世」とは、戦がすんで平和が来たら、というほどの謂である。少くとも、遅ればせながら本土復帰を果たし、海洋博のお祭り騒ぎを挙行することが「特別ノ御高配」ではあるまい。それどころか不平等条約の許に、夥しい異国の兵と涯てもない進駐基地を背負わされ、騒音に悩まされ暴行を受け続けてきたのである。本土の防波堤として斯く戦い、その三分の一を失った沖縄県民が、である。

五十年間、県民はこの不条理を耐え忍んだ。そしてひとりの少女の勇気によって、問題は提起されたのである。言うに尽くせぬ怒りを携えて上京した県知事を、首相と閣僚はまるで腫れ物にさわるといふような微笑をもって迎えた。何ら合理的な回答も与えはしなかった。むしろ、黙殺に近い。

村山首相はおそらく、軍人としてあの戦を戦った最後の総理大臣となるであろう。もしかしたら彼は、何はさておきこの問題を解決するために政権を執ったのではないかと私は思う。それが天命であると思う。

五十年前の沖縄で二十万人の人が死ななければ、かわりに二十万人の誰かが死んだのだという明らかな予測を、われわれは肝に銘じなければならぬ。だからわれわれは人間たる信義において、沖縄県民の納得する回答を用意しなければならないと思う。その結果どのような国際的摩擦が生じようと、経済的な打撃を蒙らうと、われわれは甘んじて受けねばならぬ。

日本国民の多くが、このたびの事件をまるで他国の

「在日朝鮮人への不当弾圧」を許すな！



4月27日の南北朝鮮首脳の板門店会談ライブ中継を見ていて、1979年6月、総評民間単産代表団の一員として、板門店の軍事境界線に行った時のことを思い浮かべました。北朝鮮側の建物は当時と変わっていませんが、韓国側は北朝鮮側を監視する望楼のようなものがあっただけでした=写真。

北朝鮮問題について、安倍首相はこれまで、「最大限の圧力」だけを声高に叫び続けていますが、国連の制裁決議に加えて行っている「日本独自の制裁」なるものの実態が知られていません。「圧力やむなし」との風

災厄のように感ずるのは、半世紀の施政者が沖縄県民の正当な怒りをことごとく黙殺し続けてきた結果である。沖縄戦を外地の戦と認識し続けてきた結果なのである。

大田海軍少将が沖縄県民の敢闘ぶりだけを打電して小祿の洞窟に命を断ったそのころ、摩文仁の海岸を満身創痍で徨うひとりの少年がいた。奇しくも少将と同じ姓を持つ鉄血勤皇隊員である。

ただひとり生き残った少年は、友人たちの血で染まった海に、あてもなく泳ぎ出した。彼は後にこう述懐する。

「何時間かたって目ざめると、なごさに打ち上げられていた。『お母さん』と呼んだら涙が流れた。涙がほほを伝って口に入った。そのしょっぱさを噛みしめながら、岩の上に指で『敗戦』と書いた」と。

五十年ののち、沖縄県知事となって国家の不実に立ち向かうことになった大田昌秀氏は、公人としての立場上こうした体験はもう語るまい。だがわれわれは、その穏やかな怒りに鎧われた言いつくせぬ真実を、すべて知らねばならない。

摩文仁の海に血も涙も流しつくしてしまった少年の体には、鉄の血が流れている。

沖縄県民は斯く戦い、そして五十年間、斯く戦ってきたのである。

(浅田次郎「勇氣凜凜ルリの色 四十肩と恋愛」講談社文庫)

潮の中で、実は在日朝鮮人に対するとんでもない弾圧が行われていることを、「世界」5月号で李春熙弁護士が次のように告発しています。

日本政府の北朝鮮制裁は、2004年制定の「経済制裁二法」で発動され、その対象範囲を拡大し、とりわけ在日朝鮮人への渡航禁止措置などの人権侵害の弾圧を拡大している。現在では、日本と北朝鮮との間のヒト・モノ・カネの流れが全面的に遮断されている。国内の朝鮮学校は、拉致や国連制裁を理由に高校無償化法の支給から除外されている――と言うのです。

かつて第二次世界大戦中、アメリカ政府は、日系アメリカ人約12万人を強制収容所に収容しました。しかし1988年8月10日、レーガン大統領は「市民自由法」に署名し、公式謝罪と強制収容所の存命者全員へ2万ドルの支払いを承認しました。

戦争中であっても、自国に住む敵国の一般市民の人権は守らなければならないというのは、国際的な大原則になっているのです。

安倍政権の北朝鮮に対する「最大限の圧力」広言の裏で強行している卑怯極まる在日朝鮮人への不当弾圧を止めさせ、それを許すような風潮こそ変えて行かなければならないと考えます。(福島 清)



毎日新聞特別編集委員でテレビニュース番組のコメンテーターだった岸井成格さんが、5月15日未明、亡くなりました。まだ73歳。本当に残念です。現場労働者だった私は政治記者の岸井さんとは、仕事上の接点はありませんでしたが、1975年からの毎日新聞再建闘争では、労働組合役員として一緒にいました。その時、岸井さんは再建されるべき毎日新聞の骨格となる「毎日新聞編集綱領」制定協議の組合側委員でした。

再建闘争が一段落したある日、岸井さんは私の職場にきて「親父は昔、東京日日新聞の印刷部長だった。参考になるかもしれないから読んでくれ」と言って、父・岸井寿郎さんの追悼集をくださいました。岸井寿郎さんの家の近くに、東条英機が住んでいましたが、徹底的に嫌っていたとも書かれています。

後年、政治記者となった岸井さんが、安倍晋太郎を取材した時、秘書としてちょろちょろしていたのが、今の安倍晋三首相。その頃から資質と姿勢を見抜いていたのでしょう。安倍内閣の姿勢を徹底批判してきました。安倍晋三首相はホッとしているかも知れません。親子二代、反骨の新聞記者でした。

安倍政権が2013年12月に秘密保護法を強行成立させた後の2014年2月22日の宮澤弘幸追悼・顕彰のつどいで、講演をお願いしたところ、二つ返事で承諾いただき「秘密保護法の危険性と安倍政権の暴走」と題して、「理不尽かつ残酷に殺された宮澤さんのような事件は二度とあってはならないし、その背景にある戦争は絶対に起こしてはなりません。そのために日本は戦後、営々と憲法九条を先頭に平和国家として、平和外交をしてきた歴史があります。それを守って行かなく

<コラム> 冤罪忘れるな! ②

軍機保護法付帯決議

貴族院勅選議員・織田 萬

軍機保護法を戦争推進法に抜本改定する帝国議会審議において、立憲主義の立場から政府・軍当局を鋭く問い質し、臣民の権利を不当に侵さないよう歯止めをかける答弁を引き出し、「付帯決議」を成立させる原動力となった。付帯決議は、法成立後、軍・特高・裁判所によって空文化されたが、翼賛政治体制下において尽くした最大限の良識・良心として顕彰に価する。



織田は1868年、東京の生まれ、帝国大学（東大）仏法科を出て、京都帝大教授、同法科大学長、国際司法裁判所判事（在ベルギー）など歴任。立命館大創立に参画して名誉総長。行政法が専門で著書に『日本行政法論』など。勅選（天皇の任命）の貴族院議員をうけて、当時の議事録を繙くと、秘密保護法審議を遥かに凌ぐ気迫と論理の追及をしているとわかる。学士院会員。1945年5月、戦災の中で死去。享年78。

◆ ◆ ◆
「スパイ冤罪事件」の真相に迫る決定版（本会編）
『引き裂かれた青春—戦争と国家秘密』花伝社刊

第1部＝冤罪の真相、第2部＝冤罪事実の条条検証 資料編＝判決全文、軍機保護法全文、年表
特別添付＝重要事項索引（別冊）

申し込みはFAX・メールで本会事務局まで（1面上部題字横に掲載）。送料税込み2300円。後払い。

ればなりません。そういう中で成立した特定秘密保護法は何としても廃止させなければ、宮澤さんにも秋間さんにも顔向けできないという気持ちを新たにしています」と、気迫をこめて講演してくださいました＝写真。

昨年暮に届いた喪中ハガキには、弟が71歳、甥が62歳で永眠したとありました。父・寿郎さんは80歳だったそうです。岸井さんにはそれ以上生き抜いて欲しかったと心底から思っています。（福島 清）